



ナス果実の小陥没症とナス褐色斑点病の関係

岩手県農業研究センター 岩 だて 館 康 や 哉

はじめに

岩手県のナス栽培において、果実表面に小さな「くぼみ」が多数発生する障害が発生し、問題となっている。本症状は現在、小陥没症と呼称されているが、現地農家の多くは「ボツボツ」と呼んでいる。本症は2008年に本県で確認されたのが最初と思われ、本症が発生した果実は、外観品質が著しく低下するため、出荷不能となる(図-1)。

果実の小陥没症の発生は、露地ナスの場合、秋期に多い。また、その発生様相を見ると気温の低下や降雨が見られた後に本症の発生が多いこと、その症状が貯蔵中の低温障害であるピットイング(阿部, 1974)に似ていることから、原因は当初、低温障害などの非生物的要因によるものと考えられていた。そのため、岩手県農業研究センターでは、低温障害の可能性のほか、栽培環境による影響等、非生物性要因による可能性を検討したが、本症との関連は認められなかった(岩館, 2019)。

その後の調査により、本症が発生した圃場では、必ず葉に褐色斑点病(病原菌: *Thanatephorus cucumeris* (無性世代: *Rhizoctonia solani*))の病斑が認められることから、現在、本症は褐色斑点病菌の感染によって生じるものと推定されている(図-2)。しかし、これまでのところ、ナス褐色斑点病菌の果実への直接接種による小陥没症の再現には至っておらず、本症の詳細な発生メカニズムは未解明である(岩館・佐々木, 2019)。

そこで本稿では、ナス果実の小陥没症の特徴と、これまでに実施してきた原因解明および発生抑制対策の取り組みを紹介する。

I 小陥没症の特徴と被害

典型的な小陥没症の果実表面には、数mm程度の「く

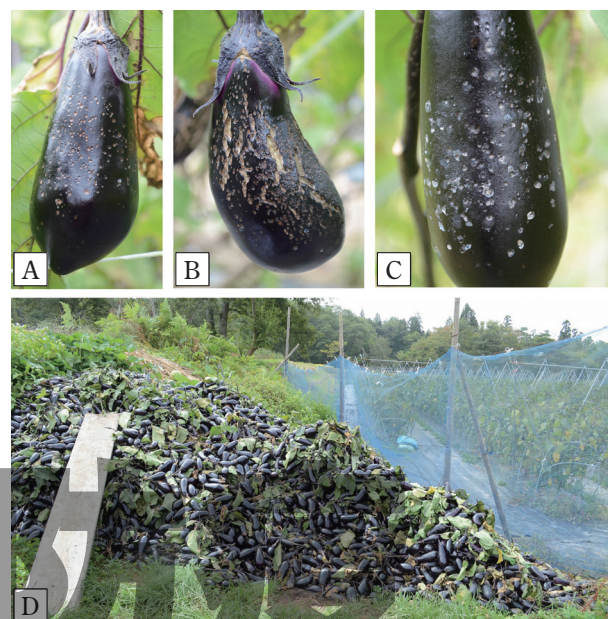


図-1 ナス果実の小陥没症

A: 典型的な果実の小陥没症。B: 発症果の肥大に伴う裂果。C: 発症部位に見られる液状物質の乾固跡。D: 小陥没症の多発により廃棄された果実。



図-2 推定されるナス果実の小陥没症発生サイクル

The Relationship between Chilling Injury-like Fruit Surface Pitting of Eggplant and Brown Leaf Spot Disease Caused by *Thanatephorus cucumeris*. By Yasuya IWADATE

(キーワード: *Thanatephorus cucumeris*, *Rhizoctonia solani*, Chilling injury, ピットイング, 低温障害)

ぼみ」が数個から多数発生する(図-1A)。「くぼみ」は、果実の片面に集中して発生することが多く、その後に拡